

第一章 綺羅星のごとく（七八年～八四年）

連城三紀彦のデビューは一九七八年、三十歳のときであった。七九年に〈幻影城〉が廃刊となるまでは同誌に精力的に短編を発表、廃刊後は〈オール讀物〉〈小説現代〉〈小説新潮〉といった中間小説誌に活躍の場を移行する。〈小説新潮〉発表作を集めた『恋文』で直木賞を受賞したのは八四年。デビュー七年目、十冊目の著書での直木賞受賞は、大衆小説作家として連城三紀彦を見た場合、非常に順調な歩みであるといえよう。

一般に、連城三紀彦は『恋文』で直木賞を獲って以降、恋愛小説に転向したと見なされている。それが適切な評価であるか否かはここではさておき、八四年までの作品群に対し、八五年以降、恋愛小説の比重が高い作品の数が急増するのは事実である。

よって本書でも、『恋文』で直木賞を受賞した八四年までを、連城三紀彦が一般にミステリ作家と見なされ、ミステリの比重の高い作品が中心だった初期として区分することにした。

この時期の連城作品は、まさに綺羅星の如き傑作が並んでいる。三大傑作短編集と名高い『戻り川心中』『夜よ鼠たちのために』『宵待草夜情』を筆頭に、『変調二人羽織』『密やかな喪服』『運命の

八分休符』『少女』『瓦斯灯』そして直木賞受賞作『恋文』。長編でも処女長編『暗色コメディ』に二大傑作『敗北への凱旋』『私という名の変奏曲』が顔を並べ、タイトルを見るだけでくらくらするほどだ。後の作品を読んでから戻ってくると、若書きという印象を受ける部分もあるものの、デビュー直後から既に連城三紀彦がとてつもない高みにいたことをまざまざと見せつける作品が揃う。『戻り川心中』は八五年の『東西ミステリーベスト100』で、刊行から五年しか経っていないにもかかわらず、錚々たる古典名作と肩を並べて9位に入っているのだから、その評価の高さは推して知るべしだ。

しかし、『恋文』以降、一般に連城三紀彦が恋愛小説に転向したと見なされた結果、特に九〇年代以降の連城ミステリーの扱いは不遇の一言となり、その不遇の煽りを受けた結果、名高い初期のこれらの傑作群すら、長年に渡り入手困難な時代が続いてしまった。一四年以降の再評価の機運により、特に評価の高い『私という名の変奏曲』『夜よ鼠たちのために』『宵待草夜情』が復刊され、『瓦斯灯』も『花衣の客』『親愛なるエス君へ』の傑作二作が『連城三紀彦レジェンド』で読めるようになったため、現在は一時期に比べれば相当に恵まれた状況にある。しかし未だ『運命の八分休符』と『敗北への凱旋』が入手困難なのはやはり、ミステリー界の大きな損失と言わねばならない。

ともあれ、デビューから直木賞受賞までの連城作品は、ミステリー読者ならば決して読み逃してはならない、珠玉にして至高の傑作揃いである。新品で手に入る作品は無論のこと、絶版の作品も入手に苦労してでも読むだけの価値は十二分にあり、お釣りがくるのは保証する。

たくさん読むのは大変だという人も、せめてこの時期の傑作群は読んでいただきたい。至福の読書体験が待っている。

01 『暗色コメデイ』

(一九七九年、幻影城ノベルス→一九八二年、CBSソニー出版→一九八五年、新潮文庫→二〇〇三年、文春文庫)

〔長編〕

(初出：単行本
書き下ろし)

〔品切れ〕

〔電書有〕

◆あらすじ

主婦の古谷羊子は、デパートでもうひとりの自分を目撃した。画家の碧川宏は、自殺しようとして飛び込んだトラックが自分に衝突した瞬間に消失した。葬儀屋の鞍田惣吉は、妻から自分が一週間前に交通事故死したと告げられた。外科医の高橋充弘は、妻が別人にすり替わっていることに気付いた――。精神病院の患者たちの周囲で次々と起こる奇妙な事件。精神科医の波島維新と森河明、婦長の在家弘子の三人は、それらの事件と謎に翻弄されるが……。

◆解題

本作は、連城三紀彦の処女長編であり、単行本デビュー作である。幻影城が倒産直前、最後に刊行した書き下ろし長編でもある本作は、精神病院を中心に、妄想や狂気としか思えない謎が次々と提示されていく眩惑的な本格ミステリだ。

先のあらすじにも記した、冒頭で提示される四つの謎も既に相当に強烈だが、本編に入るとますます不可解な謎がどんどんと積み重なっていく。患者の命を狙う謎の男、噴火する火山の消失、エレベーターから消えた女、自分の影に殺されると怯える女……。緑色のインクのような効果的な小道具と、狂気に囚われた登場人物たちの心理描写が相まって、中盤まではほとんど不条理小説か幻想ホラーか、到底ミステリとして收拾がつくとは思えない展開が続く。

後半、それらの幻想と狂気はひとつひとつ解体されていき、やがて全てがひとつへと繋がっていく。極めて不可解な謎を大量にばらまきながら、それをひとつにまとめて本格ミステリとして落とすという意欲的な構成は、島田荘司のデビュー以前に書かれた作品であるにも関わらず、島田の提唱した本格ミステリ理論を先んじて実践したかのようだ。

ただ、盛りだくさんな趣向ゆえに、さすがに最終的な謎解きに完全に納得しきることは難しい。かなり駆け足に説明される終章での解決は、相当な偶然の要素が導入されることもあって、膝を打つような爽快感に欠け、前半で提示された幻想のほとんどが解体されてしまったことに対する空漠とした印象の方が強く残る。そのため、読後には真相の印象は薄れ、前半の幻想と狂気のイメージが強く読者の中に残り続けることになる。

そういうわけで、本作は解決の魅力の欠如という点でミステリとして傑作と言うのは個人的には躊躇するが、若かりし連城三紀彦の、とびきり奇妙な本格ミステリを書く、という情熱の感じられる愛すべき作品である。次々と奇怪な謎を提示して読者を驚かせる筋運びは、後のどんでん返しを積み重ねていく作風の萌芽とみることもできる。また事件の背後に男女の愛憎関係が隠れていることや、離婚した元夫婦である波島と弘子の関係性も、後の連城三紀彦らしい部分といえる。その他にも、一通り連城作品を読み終えてから読み返してみると、その後の作品で変奏された要素をいくつも見つけ出すことができるだろう。

デビュー作にその作家の全てがある、というクリシエがあるが、奇想をまず提示してそれを現実に回収するという意味で、非常に島田荘司的な本格ミステリである本作は、その後の常識を奇想で粉砕

せんとする連城ミステリの中では、作風的には傍流に位置する。同様の路線の作品は『私という名の変奏曲』『どこまでも殺されて』『女王』などが代表的なところか。それゆえ処女長編であるが、本作から連城ミステリに入門するのはあまり勧めない。しかしファンになったら忘れず押さえておきたい一作だ。島田荘司ファンには特に強くオススメしたい。

また、本作の構成は、伊坂幸太郎『ラッシュライフ』（新潮文庫）に強い影響を与えたそうなので、伊坂ファンは読み比べてみるのも一興かもしれない。

以下は読了した人向けの余談。本作は七九年に幻影城ノベルスで書き下ろし刊行された直後に、幻影城の倒産によりすぐ絶版となってしまった、そのため八二年にCBSソニー出版からソフトカバーで再刊されたのだが、その際に加筆修正が為されている。

具体的に言うと、序章での碧川宏の飛び込んだトラックが消失した謎の解明が、幻影城版とCBS版とで全く異なっている（以降の新潮文庫版、文春文庫版はいずれもCBS版準拠）。トリックそのものが完全に差し替えられているのだが、これは幻影城版の消失トリックは海外作品に前例があったため、連城が再刊にあたってトリックを差し替えたのだそうだ（これに伴い、序章の当該シーンにも加筆修正が為されている）。連城は『運命の八分休符』でも表題作の電話トリックに山村美紗による前例があることをあとがきで断っており、トリックの重複に関しては潔癖であったようである。

幸い幻影城ノベルス版もそう入手困難ではない（Amazonのマーケットプレイスでは数百円で購入可能）ので、気になる人は読み比べてみてほしい。

02 『戻り川心中』

(一九八〇年、講談社→一九八三年、講談社文庫→一九九八年、ハルキ文庫→二〇〇六年、光文社文庫)

「短編集」「入手可」「電書有」

収録作：「藤の香」「桔梗の宿」「桐の柩」「白蓮の寺」「戻り川心中」

◆ 解題

連城三紀彦の代表作にして、日本ミステリ史上に燦然と輝く伝説的連作《花葬》シリーズ。そのうちの五作を収録した、連城三紀彦の第一短編集が本書である。二冊目の著書にして既に比類なき高みに至った、いずれも国産ミステリ短編のオールタイムベスト上位を伺う傑作が揃った奇跡の一冊だ(二〇一四年にツイッター上で行われたオールタイムベスト投票では、「戻り川心中」が2位、「桔梗の宿」が9位、「桐の柩」が28位、「藤の香」が91位にランクインした)。なお、シリーズと言っても個々の話は完全に独立しており、明治から昭和初頭が舞台であることと、花がテーマであるという以上の関連性は無い。

シリーズの第一作にあたる巻頭の「藤の香」(初出：〈幻影城〉一九七八年八月号)は、大正の末に色街で起きた連続殺人事件の話。顔を碎かれた身元不明の死体が續けて発見される。三つ目の事件をきっかけに、代書屋の男が容疑者として浮上するが……。色街には、通夜の燈がございます。という印象的な書き出しから、代書屋の隣家の男の口を借りて事件が語られる。代書屋が疑われるきっかけとなった手掛かりに對する反転も鮮やかだが(ただしこれ自体は横溝正史の有名作品に前例がある)、最後には、色街の代書屋という設定が見事に哀切な真相に結実する。本作だけでも無駄のない精緻な構成と文学的香気を両立したミステリ史に残る傑作だが、この後の収録作はさらなる高みに手を伸ばす。

続く「桔梗の宿」

(初出：(幻影城)一九七九年一月号)

も色街の殺人事件の話で、こちらは昭和初期。桔梗の花を握った

絞殺死体が見つかり、冴えない新人刑事は先輩刑事とともに、被害者が殺される直前に上がっていた娼家へと向かうが……。新本格作家のとある短編や、ある作家のデビュー作など、同じパターンの真相を扱った作品は多くあるが、このパターンの真相を広めたのはこの作品だろう(本作の前にも戦前の短編に前例があるが、その作品の知名度が上がったのは本書の刊行以後と思われる)。本作の原型は作中でも言及されており、あの話の連城流の変奏として受け取りたい。また、非常にポピュラーな恋愛もののシチュエーションの思いがけない変奏でもある。今読むとそういった一種のパターンの組み合わせでできた作品とも取れるが、桔梗の花に託された詩情のかきたてる哀切が、本作をミステリとしても恋愛小説としても歴史に残る傑作に仕立て上げている。結末の切なさからかシリーズ中でも特に人気の作品で、『連城三紀彦レジェンド』にも小野不由美の選により再録された。

「桐の柩」

(初出：(幻影城)一九七九年五月号)

は大戦前のやくざの話。潰れかけた組のやくざ・貫田に拾われた次雄は、

右手の指が小指しか残っていない貫田の手となって仕えるが、やがて貫田から奇妙な行為を求められさらには殺人を依頼される……。この設定でなければ成立しないトリックが鮮やかな傑作で、特に本格ファンに人気が高い一作。また、連城三紀彦の筆は、暴力団員になる前の、やくざの生きる任侠の世界を、この上なく艶やかに描き出す。次雄と貫田の関係性には、その後の傑作「白蘭」や『流れ星と遊んだころ』にも通じる同性愛的な耽美性の萌芽も感じられる。

幼い頃に目撃した、母親が人を殺した場面の記憶に悩まされる語り手がその真相を探る「白蓮の寺」(初出：(幻影城)一九七九年六月号)は、本書の中でも「戻り川心中」と並ぶ超弩級のホワイダニットが炸裂する傑作。

母が殺した被害者は誰なのか……という謎を出発点に、全く予想だにしないところへと読者を引っ張っていく。恐るべき真相を、巧みな伏線と語りの魔術で納得させる連城の技巧が冴え渡る。綾辻行人は本作に触発されて「四〇九号室の患者」(『フリークス』収録)を書いて、連城に読んでもらい感想を伝えられたという。綾辻作品に多い記憶テーマは本作が源流にあるらしい。

そして表題作「戻り川心中」(初出：小説現代 一九八〇年四月号)は、二度の心中未遂を歌にして遣し自害した天才歌人・苑田岳葉の死の真相を巡る、日本推理作家協会賞にも輝いた国産ミステリ史上にその名を轟かせる名作中の名作。歌集を手掛かりに苑田岳葉の情死行の真実を探る、ある種の歴史ミステリ風の構成だが、この真相に驚かない読者はまずいだろう。架空の歌人・苑田岳葉を「天才歌人」と称し、その短歌を自作して作中に引用するという、暴挙とさえ言える行為によって支えられた本作のミステリ史上に残る真相は、同時に現在でも通用する××論(ネタバレ伏せ)であり、かつ、連城三紀彦という作家の目指したミステリの境地さえも垣間見せる。

ミステリに文学性は必要か、という有名な論争がある。戦前に木々高太郎と甲賀三郎の間で勃発し、その後もミステリに対して、人間を描けているべきか、というような議論はしばしば繰り返されてきた。推理小説は知的遊戯としての論理パズルであれば良いのか、小説という体裁を取る以上文学性を持ち込むべきなのか。

そもそも本格ミステリというものは、その魅力の根幹である謎の不可解性や斬新なトリック、解決の論理性や意外性を追求するほど、プロットや設定、登場人物の行動や心理が人工的になるというジ

レンマを抱えている。現実には複雑な密室トリックやアリバイトリックを弄して人を殺す犯罪者はいないし、暗号のようなダイニングメツセージを遺す被害者もない。人間は論理的ではない行動をとるし、他人の行動を分単位で記憶していたりはしない。本格ミステリの歴史とは、その本質的な人工性をどう処理するか、という問題意識の歴史であるとも言える。横溝正史は因習に支配された田舎の共同体という舞台を発明し、松本清張は事件の背景に現実的・社会的な問題を導入することでそれを解決しようとした。綾辻行人に始まる新本格は、逆に作品全体を人工性で満たすことで細部の人工性が成立する世界を作るという処理であったとも言えるだろうし、それは近年の異世界本格やライトミステリの流行に繋がっていくと言えるだろう。

では、連城三紀彦はその問題にどう対処したのか。その答えが即ち、本書の光文社文庫版の解説での千街晶之の言にいわく――著者の作品はしばしば文学的と評されるけれども、その文学性の正体とは、探偵小説としての仕掛けを補強する、作中のトリックよりも更に一回り大きなトリックに他ならないのかも知れない――この視座である。

連城ミステリにおいて真相として明かされる動機は、時として冷徹なまでの論理性に支配されており、同時に常識的なコストパフォーマンスを無視した、およそ非現実的なものが少なくない。また、ひたすら二転三転を繰り返す物語にも本来現実性はない。しかし連城三紀彦は、そんな真相や展開に、流麗優美にして情緒豊かな文章の力をもって説得力を与えてしまう。人工性の極みに達した異様な作品世界を構築しながら、その文体が生む雰囲気作りによって文学的に、人間を描いて、いるように見せてしまうのが連城ミステリなのである。

では連城作品に我々が感じる「文学性」は、文体によって謀られた錯覚に過ぎないのか？ それもまた否である。連城作品で描かれる動機の異様さ、犯罪の壮絶さは現実的に考えればあり得ないような極端なものであるが、その極端さにこそ我々が現実には果たせない想いが託されている。コストパフォーマンスを無視し、ただひとつの目的、願いのために罪を犯し、命を賭すことは、非現実的であるから、こそ読む者の胸を打つのだ。それは論理的であるからこそ我々を納得させ、かつその論理によって非論理的なまでの異様な執念が浮かび上がるところに、我々読者は「人間」を感じる。我々は連城作品に、自分の中にある感情の、ある種の究極を見るのだ。情緒が論理で解体された先に浮かび上がる、真の動機を為した感情の究極——そして、それに対して我々が感じる憧憬。それこそが連城作品の「文学性」なのであり、そしてそれを感じさせること自体が、プロットや動機の人工性を読者の目から隠蔽するのである。もちろん、そんな妄執はあり得ない、デフォルメされた作り物に過ぎない、とする立場もあろうが、しかし作り物でなければ描けないものもある。虚構性を極めた先に浮かび上がるもの、それこそが連城ミステリの美であり、文学性であり、「人間」なのである。

そう、本書はミステリ文学性論争に対する、「文学性そのものがトリック」であり、「トリックそのものが文学性」という最終解答なのだ。故に、連城ミステリは文学的に人間を描いたミステリであるという認識も、人工性の極みに達した作り物のミステリであるという認識も、どちらも正しい。相反するその両方を内包するのが連城ミステリなのだから。

人工的な知的遊戯が、優美な文体という衣裳を纏い、感情の究極と切り結ぶことで到達した、本書はまさにミステリの至芸である。ミステリファンならずとも必読の大傑作と言いつつ切ることには何の躊躇

いもない。読まずには死ねない一冊である。

《花葬》シリーズは当初〈幻影城〉誌上で全七編の連作として構想され、「戻り川心中」は「菖蒲の舟」というタイトルの予定であった。しかし「藤の香」「菊の塵」「桔梗の宿」「桐の柩」「白蓮の寺」と五編まで発表したところで〈幻影城〉が廃刊となったため、講談社の〈小説現代〉に掲載誌を移し、全十編の構想となったが、「戻り川心中」（菖蒲）、「花緋文字」（椿）、「夕萩心中」（萩）と八編まで発表されたところで打ち止めとなる（残る二編は桜と梅だったらしい）。最終的には晩年に『幻影城の時代 完全版』（二〇〇八年、講談社BOX）のために書き下ろされた「夜の自画像」（朝顔）を含めて全九編となった。残り四編のうち「菊の塵」「花緋文字」「夕萩心中」の三編は『夕萩心中』で読める。「夜の自画像」は個人短編集未収録だが、アンソロジー『BIBLIOPHILE 騙し合いの夜』（講談社文庫）に収録されており、新品で入手可能なので、是非手に取ってほしい。

また、〈幻影城〉誌上でタイトルが予告されたまま発表されなかった「桜の舞」は、『宵待草夜情』収録の「能師の妻」になったとされている。『宵待草夜情』は本書の流れを汲み、本書に匹敵、あるいは凌駕する傑作集なので必読。《花葬》シリーズの雰囲気が入った人には、他にも『敗北への凱旋』『瓦斯灯』『落日の門』などを強くオススメしたい。

なお本書のハルキ文庫版は、『夕萩心中』収録の三編を併録し、《花葬》シリーズ八編がまとめて発表順に、一冊で読める完全版というべきバージョンである（巽昌章の名解説も必読）。古書店で見かけたらは是非確保しておきたい。